東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

形容詞の活用語形　3

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 昌久 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/1163

東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅰ　**57**　pp. 19～36，2006

形容詞の活用語形　3 *

中　山　昌　久

日本語日本文学**

（2005年８月31日受理）

3　活用形の種類と意味

活用形の，名詞，形容詞，動詞への広がり方を見よう。形容詞の活用形はこの，品詞の関係のなかに在る。活用形が文構成上で担う意味，職能を，単に活用形の意味と言う。例は，引き続き現在の東京などに採る。アクセントについて，それに語形幅のある場合には，そのうちの一つで示すにとどめる。

語形について。

個々の活用形ごとに，品詞に跨がる関係を

［動詞の活用形　形容詞の活用形　名詞の活用形］

の形に示す。そして，関係が明示されるように，後ろ寄りに得られることになる共通部分を［　　］の後ろへ括り出す。［　　］内に残る部分が語形上の異なり部分となる。［　　］内に残る部分のうち，活用形の始まりを示す・，‐は有ることがおのずと定まるので省く。アクセントは，今は，省いておく。

例えば

［ル┐カラ　┐･イカラ　-ダ┐カラ］

ならば，カラ部分を括り出し，活用形の頭の・，‐を省いて

［ル　イ　ダ］カラ

となる。普通終止の

［ル┐　･イ　-ダ］

は

［ル　イ　ダ］φ

となる。この，空の語形を示すφは括り出される共通部分の無いことを示す。

［ル┐-ナラ　┐･イ-ナラ　-ナ┐ラ］

は

［ル　イ　φ］-ナラ

となる。このφは括り出されたあとに語形部分が残らず，つまり，共通部分以外の無いことを示す。ナラ部分が名詞に付くから規約でル┐ナラ，┐･イナラがル┐-ナラ，┐･イ-ナラと書かれるように，語形が‐で分けても書かれるのは，このように［　　］内の名詞の項がφとなることに当たる。

［ロ┐ー　･カロ┐ー　-ダロ┐ー］

は

［φ　カ　ダ］ロー

＊　Inflectional Forms of the Adjective in Japanese 3 / NAKAYAMA Masahisa

＊＊　東京学芸大学（184-8501　小金井市貫井北町4-1-1）

となる。こう動詞が仮名でラ行から括り出されるのは，活用形の仮名表記で活用の行をラ行で代表させる規約のもとでなされている。その規約に拠らなければ

［･o┐ー　･カロ┐ー　-ダロ┐ー］

だから，

［φ　カr　ダr］o ー

となる。このとき，形容詞，名詞も［　］内に残る部分の終わりが r であり，活用の行の代表とした行の子音と同じだから，この限りで，規約のもとではラ行から括り出されるのである。変形規則については，別扱いだったから，それを外してから括り出す。例えば

［リタ　┐･カッタ　-ダ┐ッタ］

は，すでにそう扱ってあるリタと並行するから ┐･カッタ，-ダ┐ッタも r･i タ→ッタの変形規則を外して，

［リタ　┐･カリタ　-ダ┐リタ］

に当たり，ここから

［φ　カ　ダ］リタ

となる。これが r･i タ→ッタの類の変形規則を伴う，と記述されるのである。

活用形は，こうして得られる［　］の中身を性格に持ち，だから，［　］の中身で分類される。活用形の種類，詳しくは，品詞への語形上での跨がり方に拠る，活用形の種類である。例えば，ル┐カラ，┐･イカラ，-ダ┐カラと，ル┐，･イ，-ダとは［ル　イ　ダ］で同じであり，種類を同じにする。ロ┐ー，･カロ┐ー，-ダロ┐ーと，リタ，┐･カッタ，-ダ┐ッタとは［φ　カ　ダ］で同じであり，変形規則を伴わないのと伴うのとの違いは別扱いにして，種類を同じにする。ル┐カラ，┐･イカラ，-ダ┐カラと，ル┐-ナラ，┐･イ-ナラ，-ナ┐ラとは［ル　イ　ダ］と［ル　イ　φ］とで異なり，このような異なり方の程度で種類を異にする。

活用形の種類は，述べたように，動詞のうちでも，強変化，弱変化への語形上の広がり方，詳しくは，基準とする強変化からの，弱変化の外れ方に拠って立てられた。品詞に跨がる種類立てと，動詞のうちでのその種類立てとは共に，複数の活用語形前部の間での，同じと見做される後部の語形上の広がり方に拠る。だから，動詞のうちでの活用形の種類は，語形上の広がり方に拠る種類立ての一つの場合に相対化され，動詞に限られずに拡張，一般化される。語形上で活用形の種類には，動詞のうちに拠るものと，品詞への跨がり方に拠るものとの二つがある。両者をただ等し並に扱って総合したいのであれば，どちらの活用形の種類も同じにすることが総合的にも活用形の種類を同じにすることであり，少なくともどちらか一方の活用形の種類を異にすることがそのような異なり方の程度で総合的にも活用形の種類を異にすることである。例えばル┐カラとル┐-ナラとは，動詞のうちでは弱変化を強変化から区別せず，種類を同じにし，けれども，品詞に跨がっては［ル　イ　ダ］と［ル　イ　φ］とで種類を異にし，だから，総合的にはこのような異なり方で種類を異にする。

動詞のうちでの活用形の種類には，詳しく，強式，弱式と呼ぶ細分化もある。例えば強変化のトブでのトベ┐バと弱変化のネ(ル)でのネレ┐バとが e バ部分を共通にするレ┐バのように，母音から後ろを共通部分にするのが強式であり，トブでのトビマ┐スとネ(ル)でのネマ┐スとがマス部分しか共通にしないリマ┐スのように，そうでないのが弱式である。活用形の種類が一般化されると，活用形の種類に含まれておのずと，この細分化つまり，強式，弱式も一般化される。［φ　カ　ダ］ローが o ーを，変形規則分を外して［φ　カ　ダ］リタが i タを共通にするように，母音から後ろを共通部分にするのが，品詞に跨がっての強式になり，［ル　イ　ダ］カラがカラ部分しか共通にせず，［ル　イ　ダ］φが何も共通にしないように，そうでないのが，品詞に跨がっての弱式になる。［　］内の動詞の項がφとなるのは強式である。

ただ，品詞に跨がる活用形の種類の方は，品詞に跨がるだけあって，活用形が並行に扱えるとは限らない。異なる品詞に区別されるには理由があるのだからその一環として，活用形の種類についてはそれが必ずしも楽には組まれない。揃いきらずに欠けたり，組むにしては意味がずれたり，意味が近いのに組まれなかったりなど，いろいろな場合がある。

例えば

［ラズニ　･　･］

［リタ･　･　･］

［ルベ┐キ　･　･］

［レ┐ ・ ・］

など，形容詞，名詞に欠ける場合が多くある。欠けて空いた項には，語形に代えて・を当てておく。このように品詞の一つでしか実現しなければ，括り出しはどのようにしても記述上で差し障りは無く，例えばラズニで示すと，強式の

［φ ・ ・］ラズニ

ともしうる。また，実現しないことを別に指定しておけば，空いた項をどのような語形で埋めても記述上で差し障りは無いとも言える。実現しない旨の但し書きを添えて，他の，空きの無い活用形の種類へまとめたり，活用形の種類を新たに仕立てたりしうる。文語体との連続性を生かすのもそのような調整の一つに考えられるから，扱う範囲をそこまで広げれば，例えばラズニは，┐アツ･，┐サム･「暑からず寒からず」，ココロ┐「心ならずも」などの固定表現がそうであるように文語体で

［ラズ ･カ┐ラズ -ナ┐ラズ］

つまり，強式の

［φ カ ナ］ラズ

とあり，だから，

［φ カ ナ］ラズニ　　ただし形容詞，名詞に実現しない。

ともしうる。リテは，名詞についてはのちに取り挙げるように別に扱うものとして，ふつうには

［リテ ┐･クテ ・］

つまり

［リ ク ・］テ

であり，しかし，イ（ル）居，┐ミ（ル），オク，シマウ，ヤル，┐ホシ･ などで承けるリテは，動詞以外に実現しない

［リ ・ ・］テ

である。両者を同じリテで扱えば，活用形の実現するかどうかが，活用形の意味つまりは文中での働き方と連動する場合である。承ける語と一語化もして

［リ ・ ・］テ（ル）　　［リ ・ ・］トク　　［リ ・ ・］チマウ，［リ ・ ・］チャウ

となる。なお，イ（ル）の尊敬の ┐イラッシャルで承けるときには

［リ ク ・］テ

のままである。この［リ ・ ・］テは，品詞の一つでしか実現していないから，

［φ ・ ・］リテ

ともしうる。ただ，［リ ク ・］テへ，

［リ ク ・］テ　　ただし動詞以外に実現しない。

としてまとめられるように，その強式は採らない。

動詞の方が実現しにくい場合もある。文の途中で言いさす中止に

［リ┐ ･ク -デ］

つまり

［リ ク デ］φ

があり，用言を修飾する連用に

［リ┐ ･ク -ニ］

つまり

［リ ク ニ］φ

があり，ただし，中止と連用とは連続的である。連続的ななかで，リ┐は中止の方になりやすい。動詞のこの性格を強調すれば

［リ ク ニ］φ

は，むしろ

［・ ク ニ］φ

となる。･ク ┐ナ･，-デ ┐アルのように┐ナ･，┐アルなどで承ける ･ク，-デは動詞に並行せず，

［・　ク　デ］φ

であり，これは，実現するかどうかが意味に連動する

［リ　ク　デ］φ　　ただし動詞に実現しない。

と見られ，また，・ク ┐ナル，例外活用のスル┐為をス(ル)と書くとしての -ニ ス(ル)のように ┐ナル，ス(ル)などで承ける ・ク，-ニは動詞に並行せず，これは，その

［・　ク　ニ］φ

そのものである。同じく，ゴザイマ┐スで承けるのは

［・　・ウ　-デ］

つまり

［・　ウ　デ］φ

であり，ゾンジマ┐スで承けるのは

［・　・ウ　-ニ］

つまり

［・　ウ　ニ］φ

である。これら，┐ナ・，┐ナル，ゴザイマ┐スなどで承ける場において ・クと ・ウとは，また，-デと -ニとは，

	-デ	-ニ
・ク	［・　ク　デ］	［・　ク　ニ］
・ウ	［・　ウ　デ］	［・　ウ　ニ］

の並行関係を成す。古風な逆態仮定条件の

［・　┐・クトモ　・］

は

［・　ク　・］トモ

と見て，示した［リ　ク　デ］と［・　ク　ニ］とのいずれかへまとめられて足りそうだけれども，ただ，文語体では

［ルト┐モ　┐・クトモ　-ナ┐ルトモ, -タ┐ルトモ］

つまり

［ル　ク　ナル, タル］トモ

であり，それらと異なっている。-デ ┐スは，この，自身の活用での活用形をル┐ などにする場合では，┐・イ-デスの安定度もこの活用形では必ずしも十分でないけれどもこれは認めるとして，

［・　┐・イ-デス　-デ ┐ス］

つまり

［・　イ　φ］-デス

である。ところが，それをロ┐ーにする -デショ┐ーでは

［ル-デショ┐ー　・イ-デショ┐ー　-デショ┐ー］

つまり

［ル　イ　φ］-デショー

であり，だから，

［ル　イ　φ］-デス　　ただし動詞にはル-デショ┐ーでしか実現しない。

とまとまる。活用形の実現するかどうかがその活用形の自身の活用での活用形と連動する，このような場合もある。これは，［リ　ク　・］テがイ(ル)などで承けるときには動詞以外に実現しなかったり，［リ　ク　デ］φが ┐ナ・ などで承けるときには動詞に実現しなかったりしたのと，意味に連動する点で同じであり，さらに進んで，その意味が活用形の活用を成している場合である。┐サム・「うう寒(さむ)っ。」など，生理的な感動終止が形容詞を特徴付けると見たのは，活用形の種類に仕立てて言い換えると，・φが

［・　・φ　・］

つまり

［・　φ　・］φ

に当たることである。加えて，リッパ「立派(りっぱ)あ。」，ステキ「まあ素(す)っ敵(てき)い。」なども準じて扱われるのであれば

［・　φ　φ］φ

ともなるところだ。

組むときに，品詞による意味のずれがあればそれを，組む妨げにならないとおのずと解釈している，あるいは，そう解釈しなければならない。とりわけ，語形上で共通部分が括り出せなければ，品詞を超えて一つの活用形とする認定は，活用形の意味に多く支えられる事である。例えば

［ル　イ　ダ］φ

は，動詞の中核を成す動作動詞では ┐ノム･「酒を飲む。」のように，これからそうする未来性を，つまりは意志を帯びやすく，形容詞，名詞では ┐タカ･「背が高い。」，ア┐メ「雨だ。」のように，今そうある現在性を帯びやすい。このずれは，動詞が動的であり，形容詞，名詞が静的であるその違いに関わると見られ，組む妨げにならないことができよう。

［φ　カ　ダ］ロー

は，動詞では意志の類になりやすく，形容詞，名詞では推量である。同じく，品詞によるその違いの表れであると見られる。分ければ，推量で

［φ　カ　ダ］ロー

意志の類で

［φ　・　・］ロー

となるところだ。なお，

［ル-ダロ┐ー　┐･イ-ダロー　-ダロ┐ー］

つまり

［ル　イ　φ］-ダロー

だと，動詞も分かれずに推量である。

同時に，意味にだけ支えられるのでもない。簡潔なのが自然であり，活用形の種類も，自然になるように調整が求められる。例えば，否定の

［ラナ･　・　・］

つまり

［φ　・　・］ラナ･

と，［・　ク　デ］φを ┐ナ･ で承けると全体で否定表現になるからこれとは，否定で

［ラナ･　･ク ┐ナ･　-デ ┐ナ･］

の関係にある。

［φ　・　・］ルベキ

は，［・　ク　デ］φを承ける ┐アルが動詞だからその ┐アルでも実現できて

［ルベ┐キ　･ク アルベ┐キ　-デ アルベ┐キ］

でもある。これらなど，動詞にだけ実現する活用形と，┐ナ･，┐ナル，ゴザイマ┐スなどで承けるための，動詞以外にだけ実現する活用形とは，補い合うことが多い。詳しくは，後者は統語上で意味を説明するのだから，前者を後者が補うことが多い。けれども，これらは活用形の種類に仕立てられない。動詞以外においては一語でないことに端的に知られるように，複雑であり，自然でない。統語上でない一語のままでも，例えば，

［リマ┐ス　・　・］

つまり

［φ　・　・］リマス

と

［・　イ　φ］-デス

とは，同じ丁寧で

［リマ┐ス　┐･イ-デス　-デ┐ス］

の関係にある。けれども，

［リマ　イデ　　デ］ス

では，［　　］内に乱雑に２字の語形部分が残って，事実，同じ［　　］の中身が他の活用形で得られるはずもなく，自然でない。いろいろ挙げてきたところでは，括り出されずに残る語形部分は１字以下，つまり，無いか１字かである。同じく，

［レ┐バ　　┐･ケレバ　-ナ┐ラバ］　　［レ┐バ　　┐･ケレバ　-ナ┐ラ］

は，

［レ　ケレ　ナラ］バ　　［レバ　ケレバ　ナラ］φ

では自然でない。-ナ┐ラバだけがバの無い -ナ┐ラもあり，この違いが効いて -ナ┐ラでは３字の語形部分さえ残ってしまう。符合して -ナ┐ラバ，-ナ┐ラは，

［ル┐-ナラバ　┐･イ-ナラバ　-ナ┐ラバ］　　［ル┐-ナラ　┐･イ-ナラ　-ナ┐ラ］

つまり

［ル　イ　φ］-ナラバ　　［ル　イ　φ］-ナラ

のなかにその位置があるから，これらと，残りの

［レ┐バ　┐･ケレバ　・］

つまり

［φ　ケ　・］レバ

とがあると見られればよい。この［φ　ケ　・］レバは，名詞は無いから動詞と形容詞との間で見ることになって，強式である。［レ　ケレ　ナラ］［レバ　ケレバ　ナラ］を認めないと -ナ┐ラバ，-ナ┐ラは［ル　イ　φ］にだけ属し，こう重出しない点でも自然である。活用形を活用形の種類に重出させないようにできるのであれば，簡約さで勝るから，そうするのが望ましい。また，意味では中止で組みうる

［リテ　┐･クテ　-デ］

があり，

［リテ　クテ　デ］φ

となる。┐イラッシャルでも承け，リテ，┐･クテを┐イラッシャルで承けると述べたところはこれの，動詞，形容詞の部分であり，また，-モを加えて逆態仮定条件の

［リテ　クテ　デ］モ

もある。意味のこれらの広がりは活用形の種類としてのまとまりを思わせる。しかし，これも，［　　］内に２字の語形部分を残してしまう。ちなみに，文語体ならば

［リテ　┐･クテ　-ニ┐テ］

つまり

［リ　ク　ニ］テ

で済むのであり，問題は名詞が -ニ┐テでなくて -デであることに存する。これは，字数の違いでリテ，┐･クテと，-デとを分けるとよい。つまり，同じく中止の

［リ　ク　デ］φ

があるからこちらを元に使うとすると，リテ，┐･クテは

［リ　ク　・］テ

言い換えて

［リ　ク　デ］テ　　ただし名詞に実現しない。

に当たり，-デは

［・　・　デ］φ

言い換えて

［リ　ク　デ］φ　　ただし動詞，形容詞に実現しない。

に当たる。-モを加えた逆態仮定では

［リ　ク　デ］テモ　　ただし名詞に実現しない。

と

［リ　ク　デ］モ　　ただし動詞，形容詞に実現しない。

とに当たる。┐スクナ・のスク┐ナクモ，オソ・のオソ┐クモなどは，固定表現の範囲で［リ　ク　デ］モが形容詞にも及んだ場合である。こうして，［リ　ク　デ］φの -デが［リ　ク　・］テの名詞を兼ねており，だから，-デが重出して［リ　ク　・］テが［リテ　クテ　デ］φとなってしまう。ただ，［リテ　クテ　デ］φには意味の広がりがあるからその分，複数の活用形の，意味の近さに因る寄せ集めにとどまらないのである。こう -デは，動詞，形容詞に写して言えば，リ┐，・クに当たるのと，リテ，┐・クテに当たるのとがある。

複数の活用形の種類が特定の品詞で語形を同じにし，活用形がそこを，いわば不動点にして活用形の種類を交叉させるのが，それら，-ナ┐ラバ，-ナ┐ラ，また，-デの重出の問題である。例えば，取り挙げた

［φ　カ　ダ］ロー

と

［ル　イ　φ］-ダロー

とは -ダロ┐ーが重出し，名詞で交叉する。意志の類でありやすいロ┐ーと推量のル-ダロ┐ーとの意味の異なりはこの交叉とともに起こる。さらに，-ダロ┐ーは -ダの自身の活用でのロ┐ーに当たり，一方，ル┐に当たる活用形の -ダは

［ル　イ　ダ］φ

だった。ここでも重出し，ただし，こちらは -ダの活用の活用形がル┐に当たり，この点が異なる。活用形の種類がその活用形の自身の活用での活用形と連動する，このような場合もある。同じく指定表現である -デ┐スにも，［・　イ　φ］-デスと［ル　イ　φ］-デショーとの，活用形の種類に関わるずれがあった。活用形の活用形と連動する点で同じであり，さらには，ロ┐ーが関わって連動する点でも同じである。詳しくは，-デ┐スでは活用形が品詞によって実現するかどうかが問題であり，-ダは品詞の全てで実現はしている語形が何であるかが問題であり，この点が異なる。なお，活用形の種類が活用形の活用形と連動するこの特殊さを優先的に避けたければそうできないこともない。

［ル-ダロ┐ー　┐・イ-ダロー　-ダロ┐ー］

から動詞，形容詞はダロー部分を，名詞はロー部分を括り出し，つまり，

［ル　イ　ダ］-ダロー（動詞，形容詞で），ロー（名詞で）

とすると，活用形の種類が

［ル　イ　ダ］φ

と同じままで済む。済むけれどもこの場合には，特殊さは，括り出される共通部分にダロー部分とロー部分との語形幅のある点に移る。語形幅が無いからこそ共通部分なのであり，この行き方は採られない。こう，活用形の種類は括り出される語形の語形幅とも連動するのであり，活用形の種類を仕立てるとは，共通部分の語形幅でなくて活用形の種類でこなすことを意味する。終止の一種に

［ル-ヨ　・イ-ヨ　-ヨ］　　［ル-ネ┐　・イ-ネ┐　-ネ┐］

つまり

［ル　イ　φ］-ヨ　　［ル　イ　φ］-ネ

と，

［ル-ヨ　・イ-ヨ　-ダ-ヨ］　　［ル-ネ┐　・イ-ネ┐　-ダ-ネ┐］

つまり

［ル　イ　ダ］-ヨ　　［ル　イ　ダ］-ネ

とがある。これらも活用形が重出しており，こちらは名詞でなくて動詞，形容詞の方を不動点にして交叉する。

［ル　イ　φ］-ヨ　　［ル　イ　φ］-ネ
［・　・　ダ］-ヨ　　［・　・　ダ］-ネ

または

［・　・　φ］-ヨ　　［・　・　φ］-ネ
［ル　イ　ダ］-ヨ　　［ル　イ　ダ］-ネ

のように一方を空ければ重出させないようにできる。けれども，活用形の種類にとっては，項の語形の欠けない種類の方が自然である。こう連動しており，重出を避けることと，欠ける種類を避けることとの選択にな

る。

活用形の種類が必ずしも楽には組まれないことを示してきた。調整，解釈も要るのであり，それ次第で活用形の種類の変わることもある。そう選べる幅がある場合には，一つを選んで種類立てしなければならない。

動詞のうちでの活用形の種類には調整，解釈がほとんど要らなかった。強変化，弱変化にともに実現するか，また，それらの活用形をどう組み合わせるかはごく限られた場合にしか問題にならず，実現して組み合っているところの語形の関係だけが問題だった。品詞に跨がる種類立ては，動詞のうちでのその種類立てのようには厳密でない。品詞に跨がることの性格である。動詞のうちでの種類立てが楽に，厳密に行えたのは，実は，品詞を跨がないからである。

なお，名詞について詳しく，一般名詞と形容動詞とを分けなければならない場合もある。例えば，名詞のうちでの種類立てで触れたところを活用形の種類に仕立てて言い換えると，

［リ-ソー　・-ソー　-ソー］

つまり

［リ　φ　φ］-ソー

は，一般名詞に実現しない。連体の

［ル　・イ　-ナ, -ノ］

つまり

［ル　イ　ナ, ノ］φ

は，一般名詞が -ノで，形容動詞が -ナで実現するのが普通の場合である。さらに，オナジ，コンナなどはこのままで連体であり，もし，これらを個別の例外扱いでなくて［　　］内に加えるのであれば

［ル　イ　ナ, ノ, φ］φ

となる。同じく

［ル　イ　ナ, ノ］ヨー　　［ル　イ　ナ］モン-カ

も

［ル　イ　ナ, ノ, φ］ヨー　　［ル　イ　ナ, φ］モン-カ

となる。ただ，このように区別しなければならない活用形は僅かだから，活用形の種類を４項の

［動詞の活用　形容詞の活用　形容動詞の活用　一般名詞の活用］

に仕立てると第３項と第４項とがおおむね同じになり，経済的でない，だから，簡約さで劣る。ちなみに，文語体では，

［ルベ┐キ　・　・］

が

［ルベ・　・カルベ・　-ナルベ・, -タルベ・］

つまり

［φ　カ　ナ, タ］ルベ・

とあるなど，名詞がさらに区別される。

活用形の種類を表に示す。意味上の区分けも加えるので，意味を取り挙げてから示す。

意味について。

活用語形は，文中にあるから，かならず文構成上の成分である。成分は数少なく限られる。具体的には，終止，中止，連用，連体といった有りようが目安に考えられる。活用語形の後部，活用形が文構成に働くから，活用形は，少なくともこの成分指定に関わらなければならない。もし他に意味が目立たなければ，この成分指定だけを意味とすることにもなる。成分の各々について品詞ごとに活用形を例示しておく。

終止	-ダ	今日は雨だ。
	・イ	背が高い。
	ル┐	酒を飲む。
中止	-デ	昨日は雨で，今日は曇りだ。
	・ク	背が高く，髪が長い。
	リ┐	酒を飲み，歌を歌う。

連用　-ニ　午後は雨になる。
　　・ク　背が高くなる。
　　リテ　酒を飲んで酔ってしまう。
連体　-ノ　雨の季節になる。
　　・イ　背の高い人だ。
　　ル　よく飲む人だ。

しかし，活用形の数はこの文成分の数より多い。例えば終止で，例えば動詞で示すと

終止　ル┐　酒を飲む。
　　レ┐　酒を飲め。
　　ル┐ナ　酒を飲むな。
　　ラナ・　酒を飲まない。
　　リタ　酒を飲んだ。
　　ロ┐ー　酒を飲もう。
　　ラレ(ル)酒を飲まれる。

などのように。だから，成分指定以外の意味がある。文成分を同じにする複数の活用形は，成分指定以外の意味の存在を示して，それの違いで共存する。成分指定以外の意味が無いか有るかの違い，または，ともに有ればそれの中身の違いである。あるいは，このうちラナ・，ラレ(ル)など，自身がさらに活用する活用形ならば，決めなければならない文成分に選べる幅があってそれを決めていないのだから，成分指定以外の意味を担う。文成分を指定しないことが自身でも用言のように活用することであり，自身で用言のように活用するかしないかの幅は，文成分を指定しないかするかの幅のことである。だから，成分指定以外の意味は，文成分を同じにする複数の活用形の関係に，または，自身がさらに用言のように活用する活用形に求められる。このとき，語形は意味を担うためにあるから，活用形の語形の長い方が成分指定以外の意味を担いやすいのが良い。複数の活用形の間では語形の長い方がそうであり，また，自身で活用する活用形は語形が長くなりがちでもある。

それらの活用形の意味を，以下に示すように品詞での偏りが出るから，成分指定，強調の類，条件の類，推量の類，その他，に粗く区分けする。

成分指定とは，他の意味が目立たずに成分指定をもっとも主立った意味と認める場合である。強調の類とは，活用形を動詞ので例示するとして，ル-ヨ，ルナ┐ーなど，終止のうちで強調，感動などを加える場合である。条件の類とは，レ┐バ，ル┐カラ，ル┐ケレド，リナガラ，リタ┐リなど，連用または中止のうちでさらに意味を詳しくすると認める場合であり，これを順態仮定条件のレ┐バなどで代表させてそう呼ぶ。推量の類とは，ル-ラシ・，リ-ソー，ルソ┐ー，ロ┐ー，ルマ┐イなど，推量絡みと認める場合であり，これを推量のル-ラシ・などで代表させてそう呼ぶ。その他とは，例えばレ┐，ル┐ナならば終止のうちだけれども命令を主立たせるなど，上記のいずれにも収まらないと認める，残りの場合のための受け皿である。

成分指定の活用形は，文成分が限られるから数が少なく，他の意味を担わないから語形が短く，成分が指定されているから自身で用言のようには活用しない。強調の類，条件の類のは，成分指定以外の意味も担うから多くて良く，長い方が良く，おのおの，終止のうちに，連用，中止のうちにあるから自身で用言のようには活用しない。推量の類，その他のは，成分指定以外の意味も担うから多くて良く，長い方が良く，一つの成分のうちにあるとは限らないから自身で用言のように活用しても良い。

活用形の種類とこの意味上の有りようとで分けて活用形を表に示す。

活用形は活用形の種類を尽くすようにいろいろに挙げ，ただし，全てではない。活用形は動詞ので代表させて示す。形容詞，名詞の語形は，アクセントを除いて，活用形の種類からおのずと知られる。動詞に実現しなければ形容詞ので代表させ，形容詞でも実現しなければ名詞ので示す。・ウを ・ウ ゴザイマ┐スと示すなど，承ける語とともに示すこともある。活用形の種類は，品詞次第で実現しないのを全ての品詞で実現するのから分けて別に示す。実現しない旨の但し書きを添えれば一つの種類へまとめうるのを隣に並べ，［　］の前の括弧の括りでそのまとまりを示す。ただし，個別に［・　ク　・］トモ，［・　φ　・］φはそうしない。形容詞，名詞に実現しないル…，リ…は，ここでは全て，［φ　・　・］に入れて済ます。［φ　カ　ダ］ローと［ル　イ　φ］-ダローとに重出する -ダロ┐ーを［φ　カ　ダ］と［ル　イ　φ］とに共に示すなど，交叉したま

	成分指定	強調の類	条件の類	推量の類	その他
［ル　イ　ダ］	ル┐(終止)	ル-ヨ	ル┐カラ	ルソ┐ー	ル┐-カ
		ル-ネ┐	ル┐ケレド		
		ル┐ワ	ル┐ガ		
		ルナ┐ー	ル┐シ		
		ル┐トモ	ルト(場合)		
			ルノ(並列)		
［ル　イ　ナ］		ル┐ノ(終止)	ル┐ノデ		ルモ┐ン-カ
			ル┐ノニ		
［ル　イ　ナ,ノ］	ル(連体)			ルヨ┐ー	
［ル　イ　φ］		ル-ヨ	ル┐-ナラ	ル-ラシ・	ル┐-カ
		ル-ネ┐	ル┐-ナラバ	ル-ミ┐タイ	
			ル┐-ダノ(並列)	ル-ダロ┐ー	
			ル┐-ヤラ	ル-デショ┐ー	
				ル┐-カモ	
［・　イ　φ］					┐・イ-デス
［・　ク　・］			・クト┐モ		
［リ　イ　φ］			リ-ナガラ		
［リ　φ　φ］				リ-ソー	
［リ　ク　デ］	リ┐(中止)				
［リ　ク　・］			リテ		
			リテ┐モ		
［・　・　デ］			-デ		
			-デ┐モ		
［・　ク　デ］	・ク┐ナ・				
［・　ク　ニ］	・ク(連用)				
［・　ウ　デ］	・ウ ゴザイマ┐ス				
［・　ウ　ニ］	・ウ ゾンジマ┐ス				
［・　φ　・］		・φ(感動)			
［φ　ケ　・］			レ┐バ		
			リャ┐ー(仮定)		
［リャ　キャ　・］			リャ┐ー(仮定)		
［φ　カ　ダ］			リタ┐ラ	ロ┐ー	リタ
			リタ┐リ		
［φ　・　・］			ル┐ナリ(同時)	ルマ┐イ	ルベ┐キ
			リツ┐ツ		ル┐ナ
			リ-ニ(目的)		リナサ┐イ
			リ┐-ワ シナ・		オ-…リ(命令)
			リャ┐ー シナ・		リマ┐ス
			ラズニ		リタ・
					ラナ・
					ラヌ
					ラセ(ル)
					ラレ(ル)
					レ┐
					レ(ル)

まにする活用形の種類は単に分けて示し，活用形が重出する旨の注記を省く。［リ　φ　φ］-ソーは，形容詞の記述のし方でこの点を取り挙げなかったけれども，前部を仮名１字にする形容詞のうち，┐ナ･，┐ヨ･ではナサソ┐ー，ヨサソ┐ーであり，これらについては

［リ　サ　φ］-ソー

となる。表にはこちらを示さない。順態仮定条件の

［リャ┐ー　┐･キャー　･］

は，仮名単位でなくて子音と母音とへ分けた表記で

［･ja┐ー　┐･kja ー　･］

つまり

［φ　k　･］ja ー

となり，半母音を母音に準じさせて強式だけれども，活用の行をカ行でなくてラ行で代表させる仮名表記では，動詞の位置がφにできない

［リャ　キャ　･］ー

と書くことになる。意味上の区分けのうちの，その他は，終止の，または，自身で活用して終止にもなる範囲で活用形を示す。

示した表は，活用形の性格を，また，手掛かりを活用語形前部から後部へ逆にして動詞，形容詞，名詞の性格を映す。

品詞次第で欠ける活用形が多くある。異なる品詞に区別されるには理由があり，この，並行性の破れもその理由である。

品詞次第で欠ける活用形は，動詞に実現し，形容詞，名詞に実現しないのが目立つ。［φ　･　･］である。意味の区分けのその他に目立ち，量とともに質でも意味が，否定のラナ･，命令のレ┐などのように重要だったり，他動化のラセ(ル)，自動化などのラレ(ル)のように高度だったりする。

その活用形の意味を形容詞，名詞もそれなりに必要とするときには，ラナ･に･ク┐ナ･，-デ┐ナ･を当てたり，レ┐に･ク ナ┐レ，-ニ ナ┐レを当てたりなど，統語上で説明して対処することになる。動詞に実現しない［　］の有りようのうち，［･　ク　デ］などは，述べたように，こう補うために働く。

また，［φ　カ　ダ］の活用形は，形容詞では，すでに触れておいたように自身が動詞に活用する･カルが，名詞では，並行だから自身が動詞に活用する-ダルが，リタ，ロ┐ーなどで実現した活用語形である。動詞に活用するのがその表れであるように動詞で補われているのであり，活用形ではあっても二次的な活用形である。これは，統語上で説明する対処と連続しており，それの，承ける語との全体で一語になる場合に当たる。一語の「赤かった」「少年だろう」が-ワなどを加えると二語に割れて「赤くはあった」「少年でもあろう」となるのはこの連続関係である。動詞の活用形は強変化ので，仮名表記では活用の行をラ行とする強変化ので，示されており，一方，これらの･カル，-ダルも強変化だから，活用語形は品詞に跨がって母音から後ろを共通部分にすることになり，よって，［φ　カ　ダ］の強式となる。なお，動詞のうちでの強式では，弱変化が強変化から基本的には区別されずにそれらがともに，単なる動詞活用としてまとまる。並行に，ここ，品詞に跨がる強式では，形容詞，名詞が動詞から，アクセントを除くとして，語形上で区別されずに，これらがともに動詞活用としてまとまる。これが，強式の一般化の意義である。だから，形容詞，名詞での強式活用形は動詞化の一種であり，統語上などで他へ影響せず，別語にならない程度での動詞化と言うことができる。また，［φ　カ　ダ］の活用形はこう二次的だから，本来は形容詞，名詞に実現しないとも言える。［φ　･　･］に準じるのである。否定のラナ･などとともにこれら，過去のリタ，推量のロ┐ーも重要であり，こちらの必要性へは動詞化で対処している。

強式活用形には，ほかに，［φ　ケ　･］レバ，これの弱化，均化した［φ　ケ　･］リャー，さらに短化した［φ　ケ　･］リャが，また，動詞の項でそれと交叉して関連する［リャ　キャ　･］ー，これの短化した［リャ　キャ　･］φがある。形容詞のこれらの活用形も，レ┐バ，リャ┐ーで実現している動詞化に当たりうる。なお，動詞のうちでの強式には，例えばル┐が強変化のトブのトブ┐のu部分を弱変化のネ(ル)のネル┐で共通にするのとずれて，ネル┐の文語体のヌ┐ではそれより１字前，すなわち，活用の行の１字前の位置で共通にするように，弱変化の活用の行があたかも１字前にずれるような場合もあり，区別するためにこれを，

別方向への強式とかりに呼んでいる。強式が一般化されると，強式に含まれておのずと，この一層の細分化つまり，普通の強式，別方向への強式も一般化される。リャ¬ーの ja ー部分を ¬･キャーは ¬･ケリャーより１字前で共通にするので，割り振られて［リャ　キャ　・］が，品詞に跨がっての別方向への強式になる。［φ　ケ　・］が［φ　カ　ダ］とともに普通の強式である。

文語体まで広げれば，［φ　・　・］は時に，ラズニ，ルベ¬キで示したように，強式を積極的に示す［φ　カ　ナ］［φ　カ　ナ,タ］である。例えば，レ¬ は，¬ヨ･「良かれと思ってのこと」，オソ･，¬ハヤ･「遅かれ早かれ」がそれであるように

［φ　カ　ナ,タ］レ

である。ラセ(ル)はこうならないけれども，同じ他動化にラシメ(ル)があり，これならば「国家を国家たらしめるもの」など，

［φ　カ　ナ,タ］ラシメ(ル)

である。ちなみに，¬コトナルは，コ¬トニ殊がその名残りであるようにもとは，コト異（アクセントを除く表記。)であり，個別に，動詞化のその -ナルが自身の活用での活用形を限らなくなって出来た。

逆に，動詞の方に実現しない活用形は限られる。動詞でリ¬ が連用より中止になりやすい性格を強調してこれを外した場合の連用の［・　ク　ニ］φ，感動の［・　φ　・］φはこれである。［・　イ　φ］-デスは［ル　イ　φ］-デショーでなければ動詞に実現しない。［・　ク　デ］φは ¬ナ･ などで承けて否定などを，［・　ウ　デ］φ，［・　ウ　ニ］φはゴザイマ¬ス，ゾンジマ¬スで承けて丁寧を，統語上で説明するためのものである。動詞にしか実現しない活用形を補うためならば動詞に実現しなくて当然であり，これらのうち，［・　ク　デ］φは，述べたように［φ　・　・］ラナ･ などを，［・　ウ　デ］φ，［・　ウ　ニ］φは［φ　・　・］リマスを補う。［・　イ　φ］-デスは，丁寧で［φ　・　・］リマスと補い合うから，詳しくは，［φ　・　・］リマスを補うと見てやると良い。動詞でのロ¬ーの性格のままにリマショ¬ーは意志の類になりやすいから，推量では［ル　イ　φ］-デショーが要るのである。

こうして，動詞に実現する活用形が形容詞，名詞にも実現しやすいとは言えず，形容詞，名詞に実現する活用形が動詞にも実現しやすいとは言える。動詞は，整然と盛んに活用するのである。近似的な程度で包含関係を成すようなこの傾向も，動詞がもっとも活用らしく感じられる，その表れの一つである。

形容詞と名詞とでは，活用形の実現する範囲が基本的に重なる。似た点が形容詞と名詞との間にある，その表れの一つになる。［リ　ク　・］テと［・　・　デ］φとのずれは補い合うものであり，述べたように［リテ　クテ　デ］φが［リ　ク　デ］のもとに収まるべく解釈されている。詳しくは，名詞の方に実現しない活用形がある。［φ　ケ　・］レバなどである。補い合う点からすれば，-ナ¬ラバなどの必要性はこの名詞でもっとも高いことも考えられる。［リ　φ　φ］-ソーも，こちらは名詞を下位分類して一般名詞では［リ　φ　・］-ソーである。こう若干は，形容詞が名詞より活用らしさを高くする。

形容詞，名詞は活用形が限られるのである。限られにくい動詞を基準にしてこう言えるのであり，動詞が，比べる基準になる。

まず，活用形の語形が限られる。

基準の動詞へ写して言って，［ル　イ　ダ］カラならばル¬カラのル…，［リ　φ　φ］-ソーならばリ-ソーのリ…であるなど，形容詞，名詞はル…，リ…へ偏る。動詞はル…，リ…に限られないから，これは形容詞，名詞を特徴付ける。動詞に実現しない活用形でも，だから，もし動詞に実現することになればル…またはリ…で実現するはずである。外れるのは，［φ　カ　ダ］ローのロ¬ー，形容詞，名詞を形容詞だけで見ることになる［φ　ケ　・］レバ，［φ　ケ　・］リャー，［リャ　キャ　・］ーのレ¬バ，リャ¬ーである。同時に，これらは揃って強式であり，本来は形容詞，名詞に実現する範囲からも外れる。形容詞，名詞は，弱式では，つまり本来は，ル…，リ…に限られるのである。形容詞，名詞に実現してル…，リ…以外ならば対照して強式活用形なのは，偶然でなくてよい。強式にとってはこれは，弱式との細分化が有効であり，二次的と見る解釈が適切であることを示す事例となる。所属する活用形の限られる［φ　ケ　・］は，この点からも強式である。なお，形容詞，名詞に実現すればル…，リ…であるこの偏りの逆は，［φ　・　・］ルナ，［φ　・　・］リマスなど，形容詞，名詞に実現しないル…，リ…もあるから，成り立たない。対偶から，ル…，リ…でなければ形容詞，名詞に実現しにくい，詳しくは，弱式では実現しない。

活用形をル…，リ…に限る選択は，形容詞，名詞での実現のほかでもできる。意味上の区分けでの成分指定にはル…，リ…が，しかもル…もリ…も，あり，しかも，１字の活用形のル┐，ル，リ┐を割り当てることができ，しかも，ル…，リ…でなければ無い。また，成分指定の活用形ならば必ず形容詞，名詞に実現する。だから，ル…，リ…は，成分指定の活用形の，つまり，成分指定の１字の活用形の，語形で始まる活用形としても指定できる。形容詞，名詞に実現する活用形とは，成分指定の１字の活用形の語形で始まる活用形のことである。これは，形容詞，名詞に実現する活用形が，成分指定の活用形に，品詞に跨がることになる語形部分を付けて成っていることを示す。ル┐，ル，リ┐に語形を後ろからさらに加えたのならばル…，リ…に当然限られる。形容詞，名詞に実現する活用形の，この成り立ちが動詞について示された。

基準の動詞へ写して言っているのだから，動詞に限らずに形容詞，名詞でも，成分指定にとどまらない活用形は，成分指定の活用形に語形部分を付けて成っているのが良い。推論は形容詞，名詞でも検証される。ル…，リ…に限られる弱式活用形の［　　］の中身について，動詞ならばル，リなように，形容詞，名詞ならば何であるかが問題となる。

形容詞では，成分指定に，･イ，･ク，･ウがあり，これら以外の活用形に，┐･イカラ，･イソ┐ーなど，多く･イ…が，┐･クテ，･クト┐モなど，ときに･ク…があり，ほかには，･-ソー，･φがある。うち，･-ソーのように活用語形前部に直接に語形部分が付く有りようは，活用形の始まりの１字にさらに語形部分が付く見方で揃えて言うために，［　　］にφの残るのを生かして，･φ-ソーつまり･φ…と見ておく。実際，この場合に活用形がどの仮名で始まるかは，品詞に跨がる語形部分の始まりの仮名次第にすぎず，問題にならないのであり，このように･φに付くと見てその仮名の如何が捨象できる。こう，ほとんどが成分指定の仮名で始まるからその偏りの程度で，もろもろの活用形は成分指定に語形部分を付け加えて成っている。多くが･イから，ときに･クから成り，なお，･ウはこれに働くのが見られない。･-ソーについては，活用形前部と何らかの語形とが直接に付き合う点で，語構成においてカル･軽がカルイシ軽石，┐クヤシ･悔がクヤシナ┐ミダ悔涙とあったりしたのと似ている。前部がそのように語構成の前部分になることは，活用形へ整えて書くと，語構成のうちには限られて，いわば連体の･φがあることに当たり，だから，･-ソーつまり･φ-ソーは，この成分指定の･φにさらに語形部分が付いたとも言える。また，･φ（感動）はその･φの，終止の場合に当たる。ちなみに，┐･イケレド，┐･イシは文語体で

［レ┐ド　┐･ケレド　-ナ┐レド］　　［･　┐･シ　･］

つまり

［φ　ケ　ナ］レド　　［･　シ　･］φ

の┐･ケレド，┐･シであり，そこから，うち┐･ケレドは強式でなくなるのとも重ねて，成分指定の仮名で始まる姿に移ったものである。

名詞では，成分指定に，-ダ，-ナ，-ノ，-デ，-ニがあり，これら以外の活用形に，-ナ┐ラ，-ラシ･など，活用形前部に直接に付き，だから，･-ソーの場合と同じに活用形の始まりの仮名の如何を捨象したければこうも示せるところの-φ…が，また，-ダ┐カラ，-ダソ┐ーなど，-ダ…が，また，-ナ┐ノデ，-ナ┐ノニなど，-ナ…が，また，-ノヨ┐ー，-デ┐モがある。うち-ナ┐ラは，ナラ部分が品詞に跨がる語形部分だからその-ナ…の方には入らない。こう，･φ…を除いて成分指定の仮名で始まるからその限りで，もろもろの活用形は成分指定に語形部分を付け加えて成っている。多くが-ダから，ときに-ナ，-ノ，-デから成り，なお，-ニはこれに働くのが見られない。

ただ，除いた･φ…が多くあり，これが問題となる。ともに盛んに，ときに活用語形前部に直接に，ときに成分指定の活用形に語形部分が付く，この違いは，まとめられればそれに越したことはない。名詞は前部だけでも文成分に立つのである。

終止　　-φ　　昨日は雨で，今日は<u>曇り</u>。

中止　　-φ　　昨日は<u>雨</u>，今日は曇りだ。

のように。こう前部だけなのは，名詞活用として活用形へ整えて書くと-φであり，活用形に意味を担わせると-φは成分指定である。積極的に終止，中止を指定するのではないけれども，それは，積極的な語形でないφ部分がおのずと示す。形容詞に･φを見立てたのと同じである。

こうして，名詞でも，･φ…を除かずに，もろもろの活用形は成分指定に語形部分を付け加えて成っている。

用言に跨がって共通する語形部分が名詞では前部に直接にも付きやすい，その盛んさは，-φの存在を示す。

だから，形容詞，名詞の活用形も，成分指定の活用形であるか，または，それに語形部分を付けて成っている。成分指定の活用形が，用言に跨がって弱式の活用形の種類となり，これに付く語形部分が，用言に跨がる共通部分となって［　　］の後ろへ括り出される。また，だから，形容詞，名詞の活用形は，動詞へ写すとル…，リ…に限られる。

詳しくは，どの成分指定にどんな語形部分が付くのかが問題となる。活用形の種類では，［ル　イ　ダ］［ル　イ　φ］に活用形が目立って多い。［ル　イ　ダ］φは終止であり，一方，［ル　イ　φ］は，終止，中止の -φの存在を認めると［ル　イ　φ］φとして成分指定の活用形に，しかも，ここでの動詞，形容詞の活用形からおのずと中止でなくて終止の活用形になり，だから，両者は終止でまとまる。終止に付いて成る活用形が目立って多いのである。だから，終止に付くのがもっとも普通の場合として中核になり，終止では名詞が-ダ，-φのどちらであるか，終止以外では限られてどうあるかが問題となる。また，品詞別では，名詞に［　］内のφが目立って多い。φの多さは，-φに端的なように活用形前部が自立し，後部が緩めに前部と結び付くにすぎず，活用らしく感じられない名詞活用の性格の表れの一つである。形容詞では［　　］内のφは僅かのものに限られる。形容詞と名詞とは，活用形の実現する範囲では重なって似ており，しかし，詳しく活用形の成り立ちではこう異なってもいる。φの少なさは形容詞の方が活用らしさの度合を高くする，その表れの一つである。

こう，名詞に -φが認められることとなった。

なお，示した表は，-φを認めない場合の表である。-φを認めると，そこに並べた活用形の種類も変わる。

つまり，名詞では，成分指定の終止に -ダだけでなくて -φが，中止に -デだけでなくて -φがあることになり，こう二つあるのを調整しなければならない。この点についても述べる。例えば，次のようにすることが考えられる。

終止の -φが加わっては，［ル　イ　ダ］φが［ル　イ　φ，ダ］φとなる。［ル　イ　φ］φと［ル　イ　ダ］φとでは動詞，形容詞に活用形が重出することになるのを優先して避けるとして，これを，［ル　イ　φ］φと［・　・　ダ］φとに分ける。前者の［ル　イ　φ］φは既存の［ル　イ　φ］へ加わる。［ル　イ　ダ］カラなど，他の［ル　イ　ダ］の活用形は，後者の［・　・　ダ］と，残りは［ル　イ　・］だから新たに［ル　イ　・］を立ててこれとに分属させる。こう，重出が分属へ移る。ただし，もとの［ル　イ　ダ］には活用形が多くあるからその分，［ル　イ　・］と［・　・　ダ］とを併せる［ル　イ　ダ］も，単なる寄せ集めにとどまらない。［ル　イ　φ］［・　イ　φ］はそのままである。［ル　イ　φ］-ヨなどと［ル　イ　ダ］-ヨなどとの，動詞，形容詞での重出は，おのずと［ル　イ　φ］-ヨと［・　・　ダ］-ヨとの方が選ばれて，これへ解消される。以上に関わる分を，表を改める形で示す。ただし，挙げる活用形は僅かなもので代表させる。

	成分指定	強調の類	条件の類	推量の類	その他
［ル　イ　φ］	ル┐(終止)	ル-ヨ	ル┐-ナラ	ル-ラシ・	ル┐-カ
［・　イ　φ］					┐・イ-デス
［ル　イ　・］		ル┐ワ	ル┐カラ	ルソ┐ー	
［・　・　ダ］	-ダ	-ダ┐ワ -ダ-ヨ	-ダ┐カラ	-ダソ┐ー	-ダ┐-カ

また，中止の -φが加わっては，［リ　ク　デ］φが［リ　ク　φ，デ］φとなる。［リ　ク　φ］φと［リ　ク　デ］φとでは動詞，形容詞に活用形が重出することになるのを優先して避けるとして，これを，［リ　ク　φ］φと［・　・　デ］φとに分ける。後者の［・　・　デ］φは既存の［・　・　デ］へ加わる。［・　ク　デ］は，［リ　ク　デ］が無くなるので，但し書きの付いた［リ　ク　デ］でなくなる。以上に関わる分を，表を改める形で示す。

	成分指定	強調の類	条件の類	推量の類	その他
［リ　ク　φ］	リ┐(中止)				
［リ　ク　・］			リテ		
			リテ┐モ		
［・　・　デ］	-デ		-デ		
			-デ┐モ		
［・　ク　デ］	・ク ┐ナ・				

そして，-φを認めない場合の表の，関わる部分をこれらで置き換えると，-φを認める場合の表になる。こちらだと，-ダと -デとは

-ダ	［ル　イ　φ］	［ル　イ　・］	［・　・　ダ］
-デ	［リ　ク　φ］	［リ　ク　・］	［・　・　デ］

の並行関係を成す。-デで［リテ　┐・クテ　-デ］を［リ　ク　・］テと［・　・　デ］φとへ分属させたのは孤立せずに並行に-ダにも起こり，［ル┐カラ　┐・イカラ　-ダ┐カラ］などは［ル　イ　・］カラと［・　・　ダ］カラとへ分属する。応分の変更は，記述，説明の，ほかの部分にも生じるけれども省く。

こうして，形容詞，名詞は活用形の語形が限られる。

そして，活用形の意味も限られる。意味は語形に載るから意味も限られて当然であり，これは，意味が語形に載る現象の例である。

形容詞，名詞は成分指定，強調の類，条件の類，推量の類へ偏る。動詞は区分けのその他でも盛んであり，それらに限られないから，これは形容詞，名詞を特徴付ける。語形上で本来は弱式のル…，リ…に限られるのと重なって，意味上でこう偏るのである。意味の区分けで外れるのは，強式では過去のリタである。強式は本来の実現範囲に無いから，これは例外にならないことができる。弱式では丁寧の ┐・イ-デス，疑問のル┐-カ，反語のルモ┐ン-カである。弱式のル…，リ…は成分指定に語形部分が付いていろいろになるのであり，┐・イ-デス，ル┐-カも -デス，-カが付いてこのうちにある。語形上ではこう外れないから，丁寧の類，疑問の類でも実現すると見られる。ただ，数が少ないから，便宜的にその他での扱いになるのであろう。ルモ┐ン-カは，この -カの疑問に含まれる反語の働きでル モ┐ン-カと統語上で説明しているにすぎない。ル┐-カは付いた結果が終止になる点では強調の類に近く，┐・イ-デスは自身でさらに用言のように活用する点では推量の類に近い。なお，形容詞，名詞に実現すればほぼこれらの類である偏りの逆も，成分指定，強調の類で成り立ち，ただ，条件の類，推量の類では，［φ　・　・］リツツ，［φ　・　・］ルマイなどがあり，一応は成り立たないように見える。語形上で，形容詞，名詞に実現すればル…，リ…である偏りの逆が成り立たなかったのも，意味の区分けを加えてやれば，条件の類，また，区分けのその他に例が見えるからであり，成分指定，強調の類では，やはり並行に，成り立つ。対偶から，成分指定，強調の類，条件の類，推量の類でなければ形容詞，名詞に実現しにくい，詳しくは，丁寧，疑問といったものも除くようにすると弱式では実現しない。

形容詞，名詞に実現しない活用形の意味は，形容詞，名詞と相容れない。あるいは，意味は客観的に扱いにくく，論証の前提に使いにくいから，形容詞，名詞と相容れないと言えるように意味の方が積極的に解釈されるべきである。形容詞は静的な属性付けであり，ここから，現在性を帯びたままであり，動的な変化に遠い。他動形容詞にいたっては，話し手などの感情にすぎず，変化があってもそれが，対象のことなのか話し手などのことなのか曖昧でさえある。形容動詞も同じであり，一般名詞も，物事をただ指すのだから変化に遠い。形容詞と名詞とはまとめて扱われ，このまとまりが，活用形の実現する範囲の重なりに写っている。区分けのその他は，この性格と相容れないように考えられるのが良い。［φ　・　・］について，命令のレ┐，リナサ┐イなどは，事態の変化を求め，その事態の実現が未来に属する。現在性でなくて未来性である。希望のリタ・，義務のルベ┐キも同じことであり，分かりやすい命令に敢えて引き付けて言うなら，命令が聞き手への命令であるように，希望は話し手への命令，義務は聞き手や話し手に限らない者への命令に当たる。否定のラナ・，ラヌは，形容詞，名詞の，今在る，眼前の現在性を否定するのであり，肯定から否定への，一種の変化に当たりうる。禁止のル┐ナは，これら，命令と否定とを掛け合わせる。他動化のラセ(ル)，また，その意味の広が

りの中核を成す自動化のラレ(ル)は，高度に主語を対象語に，また，対象語を主語に変化させるのであり，これは動作について初めて成り立つことである。可能のレ(ル)などは，事態の実現への意志を背景にしており，意志は事態の変化を求めやすい。例えばこれらのように解釈される意味だから，形容詞，名詞に実現しない，あるいは，楽には実現しない。過去の［φ　カ　ダ］リタは，現在と対照するからその後の変化も思わせつつ，現在性から離れる。この意味からも，形容詞，名詞には二次的に実現すると見て適切である。丁寧のリマ┐スが問題である。丁寧は聞き手への，話し手の気配りであり，伝える内容に関わらないのが良いから，品詞を限らずに実現するのが自然である。実際，丁寧に┐･イ-デスもあるのは，さらには･ウ ゴザイマ┐ス，･ウ ゾンジマ┐スもここに関わって，リマ┐スを不備と認めて補うことであり，だから丁寧は，活用形の種類が整わないことにもなる。とにかく形容詞，名詞に実現しないのだから，リマ┐スのこの特異さには理由が積極的に求められても良いところである。これは，聞き手を対象として敬意を払う気配りが，そう対象を積極的に設定する点で動的であるのを，伝える内容と特異に混同して，伝える内容を静的でないとしているように見える。例えば謙譲動詞の┐マイルが「現場へは私が参ります。」では，リマ┐スに助けられつつも，聞き手を意識して丁寧動詞であるように，丁寧は謙譲と関係付けられ，一方，対象語をその代表として動作の及ぶ対象へ敬意を払うから謙譲は，対象を設定して動的であり，だから，動詞のうちで起こる。敬意を払うその対象を内容の対象語などでなくて聞き手に選ぶと，おのずと内容に関わらなくなって丁寧だから，丁寧に動的な対象設定のありうることは，動的な対象設定のある謙譲にこう映して知られる。形容詞，名詞に実現しないのは丁寧にこのような性格もありうることを示しており，リマ┐スはこの性格なために，形容詞，名詞に馴染まないと解釈しうる。敬語表現のうちで，尊敬のラレ(ル)も形容詞，名詞に実現しない。尊敬でも，ラレ(ル)の自動化や可能で実現する範囲から離れられないのである。

形容詞，名詞に馴染むかどうかは，区分けのその他以外についても見なければならない。意味の区分けはその他以外で優先させてあるから，形容詞，名詞に実現しない意味がその他以外の意味に同時に伴われていてもそれは，その他でなくてその他以外へ区分けされている。例えば，［リ　ク　・］テ，［・　・　デ］φは，［リ　ク　・］テで取り挙げたようにイ(ル)，┐ミ(ル)などで承けては，また，「それ，取って。」のように終止もあり，この命令でも，［リ　・　・］テになる。これらの意味では，その他に属すのであり，動作で成る動的性格が形容詞，名詞と相容れない。なお，これらのうち，進行のリテ イ(ル)，リテ(ル)については，リテ イル┐，リテル┐で現在性を帯びるから，言い方を変えて，もとから現在性を帯びている形容詞，名詞には要らないとも言える。これが，リテ┐イラシャルだと［リ　ク　・］テ，［・　・　デ］φのままなのは，尊敬を目当てとすることを示す。［リ　イ　φ］-ナガラは，多くは-モを付けた［リ　イ　φ］-ナガラモで逆態確定条件であり，ただし，「道を歩きながら考える」のような並行の用法では［リ　・　・］-ナガラである。リテ イ(ル)の，分かりやすい進行に引き付けて言うなら，並行は条件の類での進行に当たる。ただし，「昔ながらの町並」「涙ながらに話す」は，外れるから限られて固定的な範囲で，名詞での進行に当たりうる。仮定の［φ　ケ　・］レバ，仮定の［φ　カ　ダ］リタラ，並列の［φ　カ　ダ］リタリには，リテと同じく，「もう帰れば。」「もう帰ったら。」「さあ帰ったり 帰ったり。」のように終止もあり，これらの勧誘，命令では［φ　・　・］レバ，［φ　・　・］リタラ，［φ　・　・］リタリである。勧誘は命令の類である。ただ，「値段が安ければなあ。」「値段が安かったらなあ。」のような願望では，外れて，［φ　ケ　・］レバ，［φ　カ　ダ］リタラのままである。うち，［φ　カ　ダ］リタラには，「見たら子供だった。」のような，場合を示す用法もあり，この用法では［φ　・　・］リタラである。場合とは動作を起こすのであり，静的な属性付けでない。推量の［φ　カ　ダ］ローは，意志，勧誘，命令の，これらをまとめて意志の類では，取り挙げたように［φ　・　・］ローである。意志は，今在る，眼前の現在性ではすぐには要らぬことであり，未来の，動的な変化を求めやすい。こう，形容詞，名詞に実現する意味と，実現しない意味との幅は活用形にいろいろに起こっており，これらの現象は，形容詞,名詞に実現するかどうかで起こって，同じ事柄にまとまる。うち，「それ，取って。」「もう帰れば。」などは，これらを承ける部分を省いた，つまり，言語化しない言い方（非疎外用法）である。命令に類する願望が，「値段が安かったらなあ。」などのように形容詞，名詞にも実現するのは，「値段が安かったら良い。」と統語上で説明する願望のままだからである。

そして，これら，ときに［φ　・　・］になる活用形より進んで，いつも［φ　・　・］である活用形がある。だから，区分けのその他以外での，具体的に見られるところでは条件の類，推量の類での，［φ　・　・］

は，その他に属すべき意味が同時に伴われていることを示す。実際，［φ　・　・］ラズニ，［φ　・　・］ルマイは，［φ　・　・］ラナ･，［φ　・　・］ルナなどとともに否定の類を成す。これらは，条件の類，推量の類を優先させたから分かれているにすぎない。推量のロ┐ーに意志もあるように並行に推量のルマ┐イにも意志があり，意志では当然［φ　・　・］ローであるように［φ　・　・］ルマイであり，ところが，推量でも［φ　カ　ダ］ローであるのとずれて［φ　・　・］ルマイである。並行性のこの破れは，否定が形容詞，名詞に馴染まないことの表れの一つになる。リ┐-ワ シナ･，リャ┐ー シナ･など，否定のためのリ┐-ワ，リャ┐ーは，否定の類に準じる。ラナ･が･ク ┐ナ･，-デ ┐ナ･と共存するように，これらは┐･ク-ワ ┐ナ･，-デ┐-ワ ┐ナ･，また，┐･カー ┐ナ･，-ジャ┐ー ┐ナ･と共存する。これらは，弱化，均化からさらに，短化してリャ┐ シナ･，┐･カ ┐ナ･，-ジャ ┐ナ･である。並行の用法の［φ　・　・］リツツは，［リ　・　・］-ナガラと同じく，条件の類での進行に当たる。「雨が降りつつある。」という言い方は，これを統語上で終止に仕立てたものであり，確かに進行に当たる。多くは -モを付けたリツ┐ツモで逆態確定条件にもなり，ただ，こちらは，進行の意味を帯びたままなのであろう，［φ　・　・］のうちにとどまる。［φ　・　・］リ-ニの目的の用法は，今在る，眼前の現在性ではすぐには要らぬことであり，求める事態の実現は未来に属する。分かりやすい意志に引き付けて言うなら，目的は条件の類での意志に当たる。［φ　・　・］ルナリの，「顔を見るなり泣きだした。」のような同時の用法は，事態が実現するとすぐに，の意味であり，静的な属性付けに馴染まない。「値段が高いなりに品物は良い。」「金持ちなり 貧乏なり，どちらでも構わない。」などのような -ナ┐リは，そうでないから，［ル　イ　φ］-ナリである。こうして，その他以外をその他より優先させなければ，その他以外で［φ　・　・］は無くなることができる。無くなるから，形容詞，名詞に実現すればその他以外に偏ることの逆が条件の類，推量の類でも成り立つ。つまり，成分指定，強調の類，条件の類，推量の類ならば，形容詞，名詞に，馴染まない意味が同時に伴われたりしない限りで，実現する。

こうして残るところの，形容詞，名詞に実現する活用形の意味が，形容詞，名詞に馴染む，あるいは，そう解釈されるべきである。成分指定に働けることを前提として，強調の類は強調などを加えた終止，条件の類は条件などを加えた中止，連用である。なお，連体では意味が加えにくく，自身で用言のように活用する活用形の活用形をル(連体）にするとその，自身で活用する活用形の意味が加えられるだけである。これは形容詞，名詞に限らないことであり，自身で活用しない活用形で意味の加えられにくいのは連体の性格である。ただ，［ル　イ　φ］-ナラなど，仮定条件が問題になろう。事態の仮定は，変化して事態が未来に実現することになり，静的な属性，現在性と合わないように見える。事実，仮定には［φ　ケ　・］レバ，［φ　カ　ダ］リタラもあり，こう強式で二次的な方が分かりやすい。［φ　ケ　・］レバとかつては活用形の種類を同じにした［φ　ケ　ナ］レドが，強式でなくなるのと重ねて［ル　イ　ダ］ケレドへ，あるいは，組み改めた活用形の種類で言えば［ル　イ　・］ケレド，［・　・　ダ］ケレドへ変わり，こう［φ　ケ　・］レバとふるまい方を異にするのは，こちらが仮定でなくて確定の条件のままであることが関わっても良い。なお，［φ　ケ　・］レバも，「値段も高ければ味もまずい。」のような並列では確定であり，ただ，こちらは仮定の活用形の種類と同じままである。けれども，「男なら，やってみろ。」，（暑がっているのを見て）「暑ければ脱ぎなさい。」のように，仮定は事態の単なる仮定とは限らない。事態を認めながら，そこへ，内容がわでなくて話し手がわの見方に属する，表現技術としての仮定を語形に託して加えるのである。形容詞，名詞に実現しにくくないのは，仮定表現にこのような性格があり，この性格に関わることが考えられる。残る，推量の類も問題になろう。事態の推量は，僅かでも否定の可能性も含めることになり，眼前の現在性と合わないように見える。事実，推量には［φ　カ　ダ］ローもあり，こう強式で二次的な方が分かりやすい。けれども，「こんなに実が大きいだろう。」「それに，あなたは男でしょ。」のように，推量は事態の単なる推量とは限らない。事態を認めながら，そこへ，内容がわでなくて話し手がわの見方に属する，表現技術としての推量を語形に託して加えるのである。形容詞，名詞に実現しにくくないのは，推量表現にこのような性格があり，この性格に関わることが考えられる。仮定と同じにまとまり，このまとまりが，仮定では「男なら，やってみろ。」に，推量では「それに，あなたは男でしょ。」に表れる。［ル　イ　φ］-ダローは，［φ　カ　ダ］ローの -ダロ┐ーが，語形部分を付け加える活用形の性格で［ル　イ　φ］φに付いて成ったものである。この性格の存在を端的に示して，だから，-ダロ┐ーと，［ル　イ　ダ］φの，あるいは，組み改めた活用形の種類で言えば［ル　イ　φ］φ，［・　・　ダ］φの -ダとで活用形の種類が異なってくることにもなった。

形容詞，名詞の方に実現しない場合を取り挙げてきた。反対にも，動詞の方に実現しない活用形の意味は，動詞と相容れない，あるいは，そう言えるように解釈されるべきである。動詞は，整然と盛んに活用し，また，多彩に修飾成分を承け，このようにして文構成の中核に立ちやすい。このような動詞に実現しない活用形は限られていた。連用の［・　ク　ニ］φは，単純な修飾成分では動詞にとって役不足であることを映す。生理的な感動終止の［・　φ　・］φは，論理的な，冷めた動詞に似合わず，これが修飾成分を承けにくいのもその表れである。なお，［・　ク　デ］φなどは，［φ　・　・］ラナ・などを補うためだった。［φ　・　・］リマスを補うと見られた［・　イ　φ］-デスが［ル　イ　φ］-デショーで動詞にも実現したのは，丁寧のままで推量の意味を加えることができるからであり，だから，実現するかどうかが活用形の活用形と連動することにもなった。語形部分を付け加える活用形の性格が，ここには一層詳しく見られる。

活用形の，品詞に跨がる種類立てを示してきた。言語は時空に広がるから，この種類立ては，さらに時空に広げられるべきことである。

形容詞，名詞の活用形は，成分指定を中核にし，これに語形部分を付けて意味を詳しくしたり広げたりし，この有りようから，語形が，動詞へ写すとル…，リ…へ偏り，意味が，成分指定，強調の類，条件の類，推量の類へ偏る。ときには，動詞に倣って動詞活用に助けられながら，さらに意味を広げることもある。

形容詞の活用形はこのなかにある。

形容詞の活用形の，成分指定を中核にして広がるこの性格は，続いて取り挙げる諸方言もその例にして，時空に広く知られる。時空を通しての性格である。外れる場合があれば，その使われ方にとっても，その方言にとっても，外れることが特徴になる。